

香川県本部副代表の岡内利文さんは、元小学校長。去る6月22日、広島県本部の総会で、「小さな親切」の実践で学校が変わった体験を、「小さな親切と教育活動」と題して講演されました。共感をよんだ講演の抜粋をご紹介します。

私は校長になって、「小さな親切」運動に取り組んで本当によかったと思っています。

校長を退職し、今は「小さな親切」運動香川県本部の副代表として運動を進める立場になりました。学校を訪問し、「小さな親切」運動の『実践協力校』を引き受けて小さな親切を広げてください、とお願いと、「忙しくてそんな余裕はありません」と、ほとんどの学校で言われます。できない、できないと言っていたら、始めると、どんな教育の難しい学校でも学校が変わり、地域から信頼されます。

そして、保護者の考えが変わると、学校に支援的な雰囲気生まれ、学校経営はやりやすくなり、校長の仕事はなくなりやすくなります(笑)。

校長や教員の考え方が変われば、

子どもが変わります。

校長や教員の考え方が変われば、

保護者が変わります。

そして、学校が変わります。

なにも新しいことを始めたり、行事を増やすのではなく、今の活動に少しプラスするだけでよいのです。

私は決して、仕事を増やすようなことは勧めません。

「小さな親切」実行章の威力

良い行いをした子どもに、「実行章をあげよう」というと、教員は相対評価をしたがりです。やんちゃな子どもにあげようとすると、「もっと頑張っている子やいい子はいっぱいいます。なんであの子にあげるのですか」と必ず言います。

そのとき、私がいつも教員を口説く手があります。「その場に居合わせなその子にしかできない行為を、あなたに認めないのですか」。普段の行動が悪くても、その行為は真実です。

実行章の「章」は、その行為を褒める、しるしです。ですから、その行為に対してあげるのだ、と話す、ほとんどの教員は「わかりました」と協力してくれるようになりました。

実行章のクリオネバッジの威力はすごい。「ぼくもできた」「あの子ができるなら、わたしもやってみよう」。子どもは認められて嬉しい、またやってみよう、今度こそ、と心の中が広がって変わっていきます。

運動会の日、若いお母さんがガラス製の哺乳瓶を落として、割ってしまった。それを見た6年生の男の子がとっさに駆け寄り、自らほうきとちりとりでガラス片を処理したのです。運動会の後、若いお母さんが、「名前がわかりませんが、割れたガ



ラスを掃除してくれた子がいることを伝えたくて」と話してくれました。その後、実行章の推薦をして、全校生徒の前で実行章を贈呈しました。

その子は非常に喜び、次の日から誇らしげに実行章バッジをつけて登校しました。その日を境に行動が一変し、悪いことはしなくなった、と担任から聞き、私もとても嬉しく思いました。

私は、学校での「小さな親切」の実践で、初代代表の茅誠司さんのおっしゃったことはこれだ、と確信することができました。

嬉しいことに、私が校長をした4校のうち3校（1校は閉校）は、今でも親切運動を続けてくれています。